

## 学級集団と人間関係 (2)

福 代 昭 二

### 1 はじめに

どんな生物においても、その成長発達には、遺伝的形質と環境が大きく影響しているといわれている。しかし、人間の心身の発達に関しては、先天的な素質と後天的な環境の影響に加えて、人間のもつ発達への意志や意欲など、いわゆる主体性が存在するのが、他の生物の場合と異なる特色である。しかも、人間の心身の発達において、働きかけられたり、働きかけたりする環境とは、主として、自然的、物理的環境よりは、むしろ人間の歴史的、文化的諸条件を包含する複雑な人間的环境、社会的環境であるということ<sup>(1)</sup>ができる。

最近、児童・生徒のものの考え方、感じ方、行動などについて、親や教師は、従来からの子供観や教育観では理解に苦しみ、その指導に自信のもてないものが少なくないといわれている。思うに、児童・生徒は、人格形成上、既に、家族、近隣、友人、学校、学級など、多様な集団からの影響を受けている。この集団の影響には、プラスの面もあるが、そのみではなく、マイナスの面もあることを見逃すことはできない。

特に、昨今、話題となっている、児童・生徒の学業不振、怠学、学校不適応、登校拒否、校内暴力、いじめ、薬物乱用など、一連の諸問題をみると、家族集団、近隣生活、友人関係、学校や学級など、関係集団の偏りや欠陥などに起因して生ずると考えられるものが少なくない。

以上の意味からも、児童・生徒の全人的な人間形成を課題とする現在の学校教育においては、学級を始めとする集団のもつ教育力いかに、その成果を大きく左右していることを認識しないわけにはいかない。

われわれは、先に、「学級集団と人間関係」において、①学級集団の発生 ②学級編制の推移 ③学級集団成立の条件 ④学級における人間関係などについて考察した<sup>(2)</sup>。本稿では、この研究を発展的にとらえ、①学級集団の特質と機能 ②学級集団の人的条件 ③学級集団の成員の相互作用 ④級風などへと考察を進め、今後、学級経営についての追究を進めるうえでの基調に資したく考える。

### 2 学級集団の特質と機能

学級は、学校教育を行うために組織された最も基本的な児童・生徒の集団の単位である。わが国の小・中学校でも、諸外国と同様に、同学年の児童・生徒で学級を編制することを、原則としている。つまり、わが国の場合も、近代学校の成立とともに学級が編成され、以後学年別学級編制の多級学校が学校の基本形態となって現在に至ったのである<sup>(3)</sup>。

学級が発生した理由は、①一学級の児童・生徒が ②一定の時間に ③同一の教材で ④一様に授業を受ける、という一斉授業にその出発があった。このように、学級はもともと教育の便宜上、学習指導の単位集団として編成された。しかし、その後の学校教育の推移の中で、学級は多面、多様な教育的意義を

もつものとなった。つまり、学級は、級友相互、児童・生徒と教師間の人間関係や、そこに生ずる雰囲気等が、児童・生徒の人格形成に大きな影響力をもつことが明確となってきた。換言すれば、学級は、本来、学習指導の単位集団として編成されたが、しだいに生活集団としての活動を通して生徒指導を行うための単位集団として考えられるようになったのである。

以上に関しては、明治5 (1872) 年の学制頒布以後、現在に至る「学級の成立過程」で既に考察したところである<sup>(4)</sup>。即ち、「学年」と「学級」の区別は、概念上は明治初期から明確であったが、これが実質的に意味をもつようになるのは、学校規模が拡大し、単学級から多級学校へと移行した明治30年代後半のことである。このように、近代学校の充実発展の歩みの中で、学級の位置やその条件が整備されたのである。したがって、学級に対する考え方には、教育政策上の経済性という必要性があったことは事実であるが、より一層積極的な意味をもつ教育性によって、経済性との調和を求めながら、学級に対する考え方が発展したのである。

学校は、多数の児童・生徒を集め、少数の教師によって集団的な指導が行われることの多い場である。それゆえ、一定の集団を作って指導することが必要となる。しかもその集団は、学校の教育機能が与えられるかぎり最大の効果を発揮するように作られなければならない。この二つの立場を止掲して発生してきたのが学級である<sup>(5)</sup>。このような学級は、社会集団としてどのような性質をもつものであろうか。この点に関して、概要、次の四点が指摘されている<sup>(6)</sup>。

- ① 学級は教育的な集団である。
- ② 学級は人為的に形成された集団である。
- ③ 学級は人格的結合の社会である。
- ④ 学級は共同経験の場である。

また、学級集団には、フォーマルな側面とインフォーマルな側面があることも見逃すことはできない。この点について、そのフォーマルな側面では、それが教育目的を達成するための学校の下位組織として、教師の指導のもとにおかれている学習集団であるところにその特質がある。また、そのインフォーマルな側面では、ほぼ同一の年齢に属するものが、相互に直接的な人間関係を結んでいる一つの生活共同体であることをその基本的性格としている。その二つの基本的性格から、河野重男氏は、概要次のように集団的特性を指摘している<sup>(7)</sup>。

- ① 学級集団は、人為的、合理的に「つくられた」集団である。(略) この点で、遊び仲間などの自然的集団と異なる。(略) 教師の指導のもとに、一種の外的、強制的な共同生活を続ける過程を通して、しだいに全人格的な結合の行われる集団へと発展するものである。(略)
- ② 学級集団は、ほぼ同一の年齢に属して身体的、精神的にはほぼ同じ発達段階にある児童・生徒によって構成されており、また、成員はほぼ同一の地域社会において成長し、共通の社会的・文化的生活経験を有している。このことは、人為的に「つくられた」集団である学級が、やがて一つの生活共同体にまで統一される基盤を提供する。(略)
- ③ 学級集団は、意図的、合理的な共同経験の場として、パーソナリティ形成に重要な役割を果たす。児童・生徒は、学級集団において、ともに学習し、遊び、歌い、作業し、共同で遠足や旅行に行き、さまざまな行事に参加する。また、共同生活の場としての教室や運動場などの清掃や美化を行う。(略)

なお、児童・生徒は、学級集団の経験を通して、民主的な社会の成員としての資質を学

ぶだけでなく、個性を伸長し、さらには自己実現のための態度を身につけることが期待される。この意味において、次のようなパーソナリティ形成における学級集団の機能に注目することが必要である<sup>(8)</sup>。

- ① 人間の基本的な欲求である所属の欲求、承認の欲求、自律の欲求、愛情の欲求を、学級集団は、子供たちに充足させ、健全なパーソナリティの形成を促進する。
- ② 子供たちは集団活動を通して民主的な集団のもつ価値を理解し、集団に進んで参加しようとする意欲を育てる。
- ③ 集団目標の設定に参加し、集団目標を受容することによって、集団成員としての意識を高め、集団の発展に貢献しようとする態度を育てる。
- ④ 集団成員の相互作用を通して、自己理解を深め、正しい自己概念の形成を促進する。
- ⑤ 役割の理解と役割の遂行を通して、集団成員としての望ましい態度を育成するとともに、多彩な個性を伸長させる。
- ⑥ 教科の学習によって学んだ合理的・理性的な知識・技術を、学級の共同生活において実践し、その統合、定着を進める。

### 3 学級集団の人的条件

学級集団は、始めは学習のために便宜的につくられたもので、単なる集合といえる。ここにおいては、児童・生徒は、どの学級、どの学級担任の教師という選択をすることはできず、まさに「出会いの人間関係」である。この学級において、教科を中心とする一斉授業が反復実施される場合、必然的に児童・生徒は個人としての学習に終始し、また、教師は、教授のための児童・生徒の管理・訓練や施設設備に主力が注がれることとなる。これは、明治以降の学級において主流的な位置を

占め、いまだに根強い力をもった考え方といえよう。

このような学級観が基底に存在する限り、①児童・生徒による知識・技術の習得の競い合い、②教師による「沢山教え込めば歩止りが多い」という受験準備教育的な考え方、③児童・生徒の心の健康を損ねる人間関係など、歪んだ教育の実態から正常な教育の行われる学校への脱皮は容易なものではないと考えなければならない。

学級は、成員である児童・生徒一人ひとりの個性に即して、可能な限り能力の伸長を図る場である。しかし、それには競争という一面もつきまとうから、これを生み出す弊害を学級から排除し、民主的な集団に育て、成員の健全な人格の発達を図ることが大きな課題となる。このために、学級集団を生活集団として発達させ、民主的な人間関係を確立していかなければならない。

学級集団は、始めは、成員にとって、「与えられた集団」であり、いわば単なる集合であったであろう。やがてこの中に、気の合う友達や、気の合わない友達、あるいは、友人の好き嫌いなどによって、内部集団の結合や分離も見られるようになる。

小学生第6学年の事例を取り上げてみる<sup>(9)</sup>。

#### 〈事例1〉グループノート「集団の仲間意識」

中学年から集団を作って行動するようになった子どもたちは、高学年になると、友達同士の関係も深まり、よい集団にしようとする意識も強くなる。

新しい班を作った時のC子のグループノートの文である。

「私は、Wさんの班になった。メンバーは、Dさん、Wさん、S君、T君、K君、そして私の6人です。班が決まるまで、誰の班になるか、なんとなく怖かった。---(中略)---班の名前は、ひかり班です。明るく輝くように

ってという意味です。みんなで助け合って楽しい班にしたいと思います。」

この時期になると、小集団の仲間意識だけでなく、学級全体としての仲間意識も出てくる。

### 〈事例2〉作文「自分や友達を見つめる」

T子の作文である。

「I君が、きのう、私のことをグループノートに、『おこるとみんなと口をきかないからいやな気分だ』と書いた。それは、よくM君が班長でもないのに班長に命令したりして班長はいうなりになっているので、文句を言ったら、私の悪口を言っていたからだ。それで、カッとなってみんなに話さなかったのも、こういうことになってしまった。カッとしている時は、あまり話す気がなくなるのが私だと思う。それは、悪いことだと反省している。私のくせなので、直していきたい。M君も人に悪口を言う前に、一こと私に言ってほしかったと思う。悪い点を見つけてくれてありがとう。」

T子は、正義感旺盛で、少々気の強い子だったため、班長より他の子がリーダーシップをとっている様子に腹が立ったらしかった。同じ班の男の子にグループノートに書かれ、それを読んで自分の行動について考えたのである。

このように、友達についても、自分自身についても見つめ直し、深く考え、よりよくなろうとする時期が6年生なのであろう。

事例1「グループノート」は、学級担任の教師が、小集団の児童理解を深め、学校内の各小集団と小集団の連携を図ることによって、学級集団にまで高め、児童の意識を広げて、協力集団を確立する過程を物語るものとして意味をもっている。

また、事例2「自分や友達を見つめる」は、児童の仲間関係の改造にかかわるものである。

児童相互の間の壁を取り払い、何でも言える解放された関係は容易に得られるものではない。つまり、児童の間にモラルが浸透していなければ、改善された人間関係とはいえないことを物語っている。

学級集団における人間関係ないし仲間関係の調整や改造は、学級経営の中心的課題といわれている。いうまでもなく、児童・生徒には、それぞれ発達課題があるが、これらを踏まえながら、学級集団を理想的な社会構造にまとめていくことが学級担任の教師に課せられている。田中熊次郎氏は、ソシオメトリック・テストを実施し、これを資料として、学級集団の心理学的構造を次の5類型に分類している<sup>10)</sup>。

- ① 統一結合型——学級成員が相互に交渉結合し、1人のリーダーによって統一される場合と、2、3人のリーダーによって統一される場合とがある。
- ② 分団結合型——仲よしの下位集団が、互いに結合している場合である。中心人物は各小分団に配分され、すべての成員がどれかの分団に所属している。
- ③ 分団分離型——グループなどの下位集団が閉鎖的で、相互に対立している場合である。教師が、班ごとの競争を刺激したり、不公平な取り扱いをすると、この型に傾きやすい。
- ④ 一部集中型——選択が一部に集中する場合である。選択が、1人または数人に集中してかたよると、相互の対の数は減少し、下位集団の間が分離したり、孤立者が多くなったりする。
- ⑤ 多数分離型——相互的選択関係やその連結関係などが少なく、孤立している者が多い型である。

以上の類型は、大体、集団発達の水準を示しているといつてよい。①②は、理想の水準であり、③④⑤は現実の水準である。現実の

学級集団を調査してみると、外面的にはとにかく、内面的関係構造となると、理想に遠いものが多いといわなくてはならない。

学級集団の指導の究極のねらいは、児童・生徒に、自主的・主体的な社会生活の能力や態度を発達させることにある。しかしそれは、ただ集団の中で、集団を通して指導し、教育すれば、それで自主性や主体性が育つというものではない。一人ひとりの児童・生徒の成長発展を促す条件としての学級集団を質的に高める必要がある。学級集団の成長発展を図るには多様な条件があるが、特に、成員の相互作用による結合や離散の問題、同時に、教師の適切な方向感覚や援助・指導などが強く要請される課題である。

#### 4 学級集団の成員の相互作用

学級担任の教師の担任する学級の型は多様で、一つとして同じものはない。おしゃべりで落ち着きを欠く学級があるかと思えば、親密ですなおな学級もある。このように大きな相違は、児童・生徒の特質から生ずるものであろうか、それとも教師による学級集団の取り扱い方の違いによって生ずるものであろうか。

いうまでもなく、学級は一つの社会的場である。児童・生徒は、教師の影響を受けるのみでなく、子供たち相互も影響し合っている。学級が、いかに児童・生徒中心、あるいは、自由放任的に運用されたとしても、究極的には、教師によって吟味・検討、評価されている。学級担任の教師は、学級に対して、直接・間接、あるいは指示・非指示の別はあるが教育的影響力をもっている。したがって学級における児童・生徒の言動は、学級担任の教師の影響を受けるとともにコントロールされているのである。例えば、「学級の仲間意識を育てる」という課題をかけた、成員が努力する過程を考えてみよう。これは一見望ましいこ

とのように思える。しかし、仲間意識と裏腹には、排他的な意識や閥意識が生じやすいという問題も含んでいる。この点について深い洞察ができ、先取りして、学級集団が発展的に育つよう、成員の内的・外的な人間関係の過程を見守り、援助・指導することが学級担任の教師の役割であり、また、教師の存在理由がそこにあるといえよう。

ここで、東京都の住宅地区の、ある小学校第6学年の学級<sup>(11)</sup>から提供を得た児童作文を手がかりとして、ある事件をめぐる、学級の成員の相互作用と、学級担任の教師のリーダーシップ、家庭との連携による、問題解決の過程を具体的に考察してみたい。

##### 〈事例〉作文「私の考え」6年K男

「ぼくは、受験がおわって気持ちがゆるんでいるときに、T男くんたちとあそんだ。とってもたのしく、また、うれしかった。その翌日もあそんだ。そのときこの事件がおこった。

最初ぼくたちが、『あそぼつ。』といった。でも、M男君はだまって家に入ってしまった。だから、ぼくたちはおこって外に出た。しばらくたったらM男君が、『ばかやろう。』といったので、ぼくもこのころから少しおこった。だからみんなもさらにおこったと見える。そして、またM男君の家のドアをドンドンと、たたいたが、いっこうに出てこない。

5時すぎたころに、M男君のお母さんが帰ってきた。そして、ここから話し合いがはじまった。最初はO男君だけが話していたが、みんな時間がたつにつれて、あつまってきた。ぼくは、ずっとその話を聞いていた。M男君のお母さんが家に入ってからしばらくして、M男君に問いかけはじめた。『なんでばかやろうと言ったんだよ』といったらM男君が、『くやしかったから。』といったら、これは納得できたが、これ以後の問いに対しては無言だったから、どうしてか納得できなかった。また、

M男君のお母さんが出てきたので、また話合った。そのとき、ぼくは、きれいな言葉として、M男君のお母さんに、『あなた』と言った。M男君のお母さんは、『大人に向かって、“あなた”なんて言葉を使っていいと思うの。』と言ったから、ぼくが、『ごめんなさい。これからつかいませぬ。』といったら、M男君のお母さんが、『心からちゃんとあやまっていない。目をみればわかる』と言った。ぼくは本当にあやまったのに、そのような言葉を言われたらすごく悲しかった。

この前のことだが、M男君のお母さんが、『自分の家のドアを開けるのは自由でしょう。』と言った。ぼくはこれに疑問をもった。あそびたくないなら、少しでもM男君自身から『あそびたくないからあそばないよ。』と言ってくれたら、ぼくたちは、ここまでやらなかったと思う。また、これも少し前のことだが、M男君のお母さんが、『無視するのは、口をききたくないから無視するのよ。』と言った。これも疑問に思った。なぜなら、このような結果になるには、その理由がある。その理由もM男君は話してくれなかった。

しかし、ぼくたちも、しつこく、ドンドンとドアをたたいたり、ぼくじしんは、きれいな言葉として使った『あなた』と言う言葉、どれもぼくたちが本当に悪いことではあるが、ぼくがいちばん腹が立ったのは、ぼくがあやまったのに対して、『心からちゃんとあやまっていない。目を見ればわかる。』と言われたときである。でもやっぱり、ぼくたちが悪かったと思うから、ぼくは家へ帰ってあらためて、M男君の家へ電話をしてあやまった。でも、この事件は、7割はぼくたちが悪いと思うが残りの3割は、M男君側にも責任とまではいわないけれども、あると思う。」

#### 〈事例の梗概と考察〉

##### ① K男の作文の背景

ア 昭和60年3月上旬、6年の学級のK男を中心とする交友グループが、M男を仲間に誘い込もうとして、M男の家にやってきた。その際、度を越えた言葉のやりとりや行動に不審を抱いたM男の母親が、翌日、学級担任の教師を訪問して、ことのしだいを子細に伝え、卒業期に適切な指導を行うよう要望した。

イ 学級担任の教師は、早速、学級指導の時間に、この母親から聞いた内容を児童全員に伝え、平素の学校生活の交友関係や問題点などを尋ねたり、この事件に対する児童の意見を質したりした。その後、全員に、「私の考え」という題の作文を書かせた。前記、K男の作文は、その際のものである。

##### ② 学級集団におけるK男の位置

ア S学級には、K男を中心に、T男、O男など数人の仲よしグループがあり、常に友人を誘って仲間を増やそうとしていた。

イ このグループは、学校生活において無軌道に走るほどではないが、粗暴な言動をする者も含まれていた。このため、学級では、K男らのグループの誘いに対し、気の弱い者をはじめ、必ずしも心よく思っていない者もいた。このような情報は、子供を通じて、母親にも伝わっていた。

##### ③ M男をめぐるトラブル

事件は、3月上旬の下校後、K男らのグループがM男の家へ行き、「遊ぼう。」と誘いをかけた。しかし、K男らを警戒していたM男はそれを断った。しかし、その断り方がグループの友人を無視したということから、K男らのグループはエキサイトした。そして、帰宅したM男の母親との言葉のやりとりも加わってトラブルへと発展した。

##### ④ 学級指導における成員の意見

学級指導の時間における級友の多くの意

見は次の二つに集中した。

ア しつこく友人を遊びに誘おうとしたところに問題がある。(K男らに、対する批判)

イ 友人の誘いに対し、冷たく断ったところに問題がある。(M男に対する批判)  
そして、友人を誘うK男の側は、くどき、しつこさを反省し、誘われたM男の側は、誤解を招くことのないよう明朗な対応ができなかったことを反省する、という結論が成員の総意としてまとめられ、提言となった。

# ⑤ 考察

ア M男の母親について考えてみたい。人生経験の豊かな大人として、平素から寛大な心や温かい気持ちをもってK男らのグループに対応していたならば、K男の小さな胸を痛めるようなことはなかったであろうと、K男への同情も湧いてくる。しかし、母親が、学級担任の教師に、即刻、事実の連携をとり、学校の指導を待ったという冷静さは、問題の解決を適切に推進させたものと考えられる。

イ もし、この事件について、M男の母親から、学校への連絡が無かったならば、M男や、母親の対応をめぐる、K男らのグループの一方的な団結を強化させ、教師が知らぬ間に独走し、そのあげく、「いじめ」などの問題にも発展したであろうと想像される。

ウ 小学校卒業期の、学級の友人関係をめぐってのトラブルを、家庭からの連絡を手がかりに、学級担任の教師は、「臭いものに蓋<sup>ふた</sup>」という考え方でなく、教師が産婆役となって、成員全部が真剣に考え合い、集団思考による方向性が打ち出されたことは評価できる。

エ おそらく、この学級から巣立っていった卒業生は、今後、中学・高等学校など

の生活において、交友関係に冷静に対応する考え方が育ったことであろう。また、M男とK男らのグループの対応に類似した場面に直面した場合も、適切に判断し、これを乗り越えることができるであろう。

学級担任の教師の指導の範囲は、学級の諸活動は言うに及ばず、成員の下校後の地域における交友関係などにも眼光が行き届き、承認や黙認などが、権威をもって受け止められる必要がある。一方、児童相互・生徒相互の影響力の大きいことも認識し、成員相互あるいは学級集団全体の人間関係に対して、学級担任の教師は不断の働きかけをするように努めなければならない。

ここで再び学級集団の成員間の相互関係の複雑さに視点を当ててみたい。学級集団には、意図的、計画的に作られた組織があり、これによって、児童・生徒の地位や役割が明確になっている。しかし、これは、外側から与えられ、枠づけられた関係の場合が多い。ところが、学級における生活を続行しているうちに、集団内の成員間の相互関係には感情や判断その他の心理的な働きが伴ってくるようになる。しかし、その内面的な関係の事情については直接に把握することはできないのである。

「現実の集団現象は、外面と内面と、二つの関係構造の矛盾葛藤としてとらえられなければならない。現実の集団過程はそのバランスを求める過程である<sup>(12)</sup>」。

事例は、5年生から生活を共にしている6年生の学級集団の卒業期に起こった事件である。したがって、成員は、学級における位置、役割関係等の分化や、これらに関連する対立・調整等の経験を通して外面的な関係はよく知り合った間柄であり、親和的な感情も相等に高まっていたと考えられる。しかし、成員相互間の信と不信、親和と反発、尊敬と軽蔑、愛情と憎悪などの内面的な関係について

は、学級担任の教師、成員ともに手の届かない面が少なくなかったであろう。

この把握しにくい成員の内面的な関係が基盤となり、これに加えて、教師の目の及びにくい、成員の校外生活の中で事件（事例）が発生している。したがって、考察で前述したように、母親からの連絡が無かったとしたら、集団の分裂や不安定は一層増幅し、個人に対する一部成員による「いじめ」は進行したであろう。しかし、この問題を学級成員全体の問題として受け止め、十分に話し合う機会をもったことにより、各成員の持ち味を生かし、連帯感に基づく建設的な意見を交換し、提言も行つて、無事卒業式を迎えることができたものと考えられる。

## 5 級風

住みなれば、意識もしないし、さほど考えたり、感じたりしないが、家にはその家ならではの雰囲気、習慣、伝統(承)、感情等がある。家族は気がついていなくても、他の家とか、社会とかのかかわりの中では、「わが家」「わが家族」「わが家の料理」「わが家の柿の実」等々の意識ができあがってくる。この「わが〇〇」意識の底には、家族一人ひとりを結び合わせ、一体的なものとして、他に対する思想・感情・意志・態度などが宿っている。

家庭を直ちに学級と置き換えることはできないであろうが、一つの発想として考えてみよう。学級は、学校教育を行うために組織された最も基本的な児童・生徒の集団の単位である<sup>(13)</sup>。学級といっても、それが編制された当初には成員の一人ひとりを内面的に結合させるものが殆どないままの集合体に過ぎない。発表された学級名簿に従って、集まった集団といった性格が濃厚である。しかし、学級の生活が展開して、成員相互の交流、学級担任の教師の対応、他学級とのかかわりなどを経

て、学級には、個々の児童・生徒の総和以上のものが成立する。つまり、自己以外に「われわれ」ということが、児童・生徒の意識の中にできあがってくる。これは、学級に対する所属感から連帯意識への高まりとみることできる。こうして、「われわれの先生」「われわれの学級新聞」「われわれの球技大会」「われわれの懇親会」等々ということになる。ここにおいて、家風に見たと同様に、学級の成員が共有する思想・感情・意志及び態度などが成立するようになる。出会いの形で成立した学級の成員が、相互に影響したり、影響されたりした結果、個々の児童・生徒にはないユニークなものが形成される。これは、学級意識ということができ、この学級意識の内容が客観化されて、規則、習慣、伝統といったものとなる。これは、学級精神とも考えられる学級の集団規範である。これに対して、多くの成員は、拘束、抑制されたという意識をもつことは少なく、むしろ、安定した客観的なものとして、意識しているように考えられる。しかし、学級の現実に目を向けて子細に考察してみると、成員が級風に左右されたり、同調したりする傾向も見られる。級風とは、今まで見てきたような学級意識や学級精神と呼ばれるものを含む学級の集団特質にほかならない。

学級集団の雰囲気は級風形成の基盤であり、学級の雰囲気が永続的・固定的になると「級風」といういわば規範王国というものが形成される<sup>(14)</sup>。また、学級集団の雰囲気は、子供たちと教師の行動を推進する力のパターンで、それは、子供と子供、教師と子供、教師と集団などの社会的相互作用より発達する<sup>(15)</sup>。したがって、学級集団の中に行きわたっている緊張の度合いは、教師と子供の相互作用の量と質、学習や作業に対する熱意などを含んでいる<sup>(16)</sup>。この立場から、古旗安好氏は、学級の組織的な観察から得た二つの学級の対照的



な雰囲気をかかげ、その形成の要因を次のように述べていて、大変示唆に富んでいる<sup>(17)</sup>。

〈一つの学級の特徴〉

この学級担任の教師は、子供と温かい友情的な関係、つまりラポールを形成している。授業における特質は、

- ① 民主的な手続きで、いくつかの班や委員会などの小集団をつくり、特殊な問題や課題作業を遂行させるように計画する。
- ② 教師は生徒の理解にもとづいて、彼らの能力と要求に適応した授業を行う。
- ③ 教師と生徒との間がらには、温かい、公正な相互作用があり、また、教師は円満な情意的特質を有している。

〈もう一つの学級の特徴〉

この学級担任の教師は、子供とラポールの形成が不十分である。授業における特質は、

- ① 教師によって細密な授業計画が立てられ、その授業過程における変化はほんの2～3にすぎない。
- ② 教師が質問し、生徒が答える、というフォーマルなやり方が一般的である。
- ③ 教師は教材に習熟しているが、学級とはいえば、緊張した情諸の雰囲気があったり、彼の神経質なところがめだつのである。

学級集団の雰囲気や集団の規範などは、その部分としての各成員、児童・生徒に重大な影響を及ぼし、それは、プラスにもマイナスにも機能する。

学級集団の機能とその指導の在り方について、田中熊次郎氏は、概略、次のように述べている<sup>(18)</sup>。これは、児童・生徒の人間形成上、学級集団の在り方を追究する上で大変示唆に富んでいる。

- ① 第1に、子供たちの学習の態度や動機づけは、個人的のように思われているが、実は集団的なものである。みんながわいわいさわいしている時に、ひとり静かに学習にそしむというような例もないとはいえない

が、それはまれである。そこで、学級をいくつかの小集団に分け、かような小集団単位の協力的学習を提案したいと思う。

- ② 第2に、集団というものは、何かのきっかけで、いくつかの徒党に分裂しやすいし、また、たがいに緊張を高めやすい。そうすると、表面おだやかに見えても、内面において、不安やコンフリクトが生ずる。あるいは、成員の一部に動揺が起こると、たちまち全体にひろがる。ある場合には、群集のようになってしまう。特別活動などが、おざなりになるのは、そのためである。したがって、集団のダイナミックスを理解し、集団指導法を研究しなくてはならない。

- ③ 第3に、30名、40名という集団になると、その中で、ある一部の成員が疎外される。疎外され孤立した子供は、どうしても異常に傾くであろう。それは、その子供たちの性格であるとばかりきめつけるのでは、解決策はないのである。それよりも、その集団のあり方を考えてみる。すなわち、集団の心理学構造に着目し、その構造を変革する方向で研究する必要がある。

われわれが追究しなければならないのは、一人ひとりの児童・生徒の成長発展であるというものの、それは同時に、集団の成長発展の問題になるのである。そしてまた、集団の成長発展が、個の成長発展を促す条件になるということである。個と集団と、そのいずれに傾き過ぎても、人間の教育としては不備になるからである。

## 6 おわりに

学級は、元来、学校教育を推進する上での便宜上、学習指導の単位集団としてつくられたものである。しかし、児童・生徒にとっては、共同生活を営み、人間関係を深める単位集団である。教育的にこの点が強調され、今

日では、学級は学習共同体であるとともに生活共同体であると考えることができる。また、学級集団による教育指導の目的について、個人に重きを置くか、集団を重視するかによっても古今東西、多様な考え方も生じている。しかし、学級には、これらを超え、あるいは基盤となる、次のような性格が存在する。

- ① 学級は、児童・生徒各人の個性・能力を伸長し、自律的な生活態度を育てるという個性化の要求に応ずる共同体である。
- ② 学級は、自他の人格を尊重して互いに協力し、社会秩序を守り、自己の責任を重んじて社会の福祉に貢献するという社会化の要求に応ずる共同体である。

学校における学級集団の性格・位置・役割などの教育的意義が大であることは、本稿の一貫した考え方である。学級は、学校教育の発足と同時に誕生し、発展する学校教育と並行して歩み続け、現在は、学級を抜きにして児童・生徒の教育が論ぜられないほど、学校の中で占める学級の存在意義と役割は大となった。

しかし、ここで、今一番考えておくべきことは、「集団は教育の手段である。(19)。」ということである。教育の究極的な目的は、児童生徒一人ひとりの人間形成にあるということである。したがって、児童・生徒の学級に対する集団意識を養うことや、学級を愛する心、豊かな人間関係、適切な級風を育むことも、児童・生徒の個の形成の条件整備の充実であり、手段の徹底であることにほかならない。いわゆる「まとまりのある学級」や「生き生きとした学級」、あるいは「人間味のある学級」をめざして、学級担任の教師も児童・生徒も努力するが、「集団のあり方は教育の終点ではない。それはせいぜい、未来にむかって突き進む個々人の個性的なあり方の代替物にすぎない(20)。」のである。何と云っても、学級集団

は児童・生徒にとって生きた集団である。児童・生徒一人ひとりは、学級における生活を通じて、個（個性化）と集団（社会化）の問題に苦しみ、成員相互が協力して解決し合い、個の形成上プラスの影響を多く受けて、意欲をもって、未来をめざして出発する、このような学級集団と学級経営が求められているのである。

## 注

- (1) 原俊之「教育における学級集団の意義」(教育学全集12) 小学館 1968年 P. 2
- (2) 福代昭二「学級集団と人間関係」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第30集 1986年 P P. 11~24
- (3) 同上 P. 13
- (4) 同上 P P. 11~15
- (5) 教師養成研究会「学級経営の心理」 学芸図書 1960年 P. 3
- (6) 同上 P P. 3~4
- (7) 河野重男「教育経営」(教育学叢書12) 第一法規 1969年 P P. 173~174
- (8) 宇留田敬一「学習集団の編成」(現代学校経営講座2) 第一法規 1976年 P P. 18~19
- (9) 銀杏陽子「個人ノート・グループノートなどからとらえるねらいと指導計画」(小学校学年別生徒指導ハンドブック 第6学年 福代昭二編) ぎょうせい 1987年 P P. 19~20
- (10) 田中熊次郎「新訂 児童集団心理学」 明治図書 1975年 P P. 252~254
- (11) 井関義宣 東京都中野区立東中野小学校 第6学年1組 1985年3月
- (12) 田中熊次郎「新訂 児童集団心理学」 明治図書 1975年 P. 50
- (13) 福代昭二 前掲 研究紀要 第30集 P. 11
- (14) 古簀安好「学級の集団経営」(宮田丈夫編

講座学級経営2) 明治図書 1968年 P.

173

- (15) 同上 P. 173
- (16) 同上 P. 173
- (17) 同上 P P. 173~174
- (18) 田中熊次郎 前掲書 P. 260
- (19) 上田薫「教育における個と集団」(教育学  
全集12) 小学館 1968年 P. 314
- (20) 同上 P. 314